

よか ネット

NO.51 2001.5

(株)よかネット

もくじ

NETWORK

- 図書館が増えていく中でネットワークシステムを
どのように考えていくのか 2
- 老僧は「私のこの寺の住職の歴史は“過疎との
戦いの歴史”でした」といった 4
- まちの人に「こころ」と「元気」の産直を！
第3セクター研究会・第65回地域ゼミ 7

見・聞・食

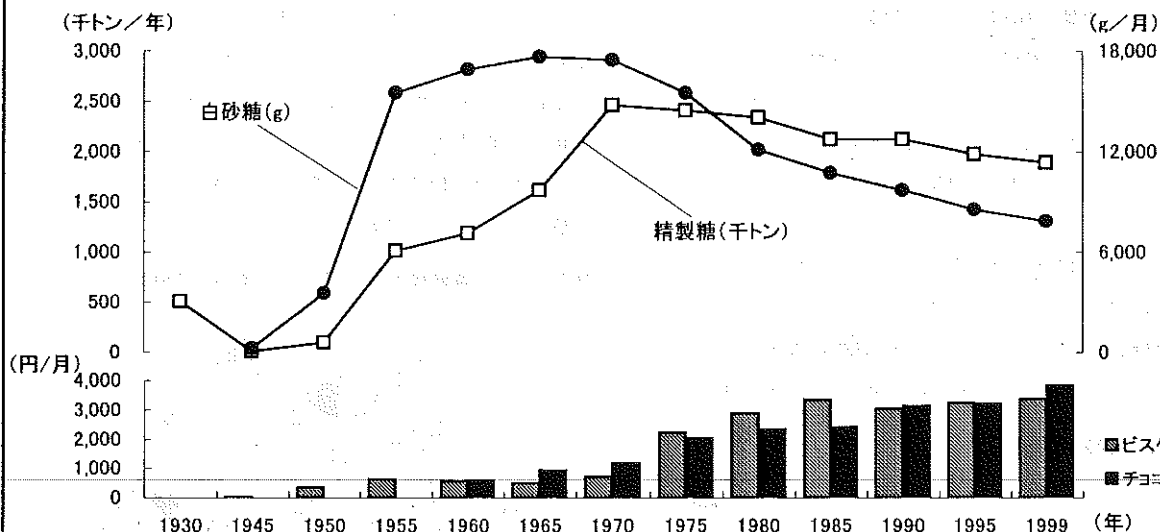
- 浮羽町の歴史文化を今に伝える魅力的な
地域資源となりうるか ～浮羽町山北の河北家～ 9
- ひなまつりが各地でイベント化 11
- 自分で作ったお菓子の味は格別なもの
～佐賀和菓子作り体験 13
- 西南学院大学ブランドのお菓子のはなし 15
- 地元産品を持ち寄り村の将来をワイワイガヤガヤ
～七山村総合計画報告会 16

近況

- 長崎ぶらぶらチャンポンツアー ～SAS九州春の旅行 17
- 「甘夏みかんの怪」二題 18
- 子ども達が80才の高齢者に
～ジュニアボランティアスクールで高齢者疑似体験 20
- 山の林間学校 21
- 新人紹介 21

お知らせ

●40代～50代を境に甘さの感じ方が違う？



※1：白砂糖、ビスケットは長期統計総覧、家計調査年報より。

なお、白砂糖の1990年以降は「砂糖」という項目なのでわずかに数値が違う。

※2：精製糖（加工品に使う砂糖）は、「日本の百年」国勢社より。なお、値は製造量となっている。

※3：チョコレートは家計調査年報より（1960年以前のデータは見つからなかった）。

甘夏ミカンの味に対する感想に40代～50代を境に違いがみられた。子供の頃の甘い物を食べた経験の違いに関係があるのでは、と思い家庭での砂糖・菓子の普及の経過をみてみた。

白砂糖に注目すると、1955年の消費量は5年前に比べて5倍に急増している。（このとき世帯人数も多く4.9人、ちなみに1999年は3.3人）。この年に生まれた人は、現在45才。生まれたときから家庭で砂糖の味を知っていた。1955年以前に生まれた世代とそれ以降の世代とではこれが甘さの味覚の違いとなって現れており、酸味の感じ方にも影響を与えているのではないだろうか。なお、1955年までは菓子類は一般に普及しておらず、ビスケットとチョコレートの急増は万博の頃である。菓子に使われる精製糖の消費量がその頃増え、家庭での砂糖の消費量はそれ以降減少している。（本文18頁参照）

図書館が増えていく中でネットワークシステムを どのように考えていくのか

山田 龍雄

10年～15年ぐらい前であったと思うが、一時期、各自治体で同じような文化ホールが建設された時期があった。ここ10年くらいをみると、福岡県内の町レベルで図書館の建設が進められているようである。実際、図書館のない町で「どんな施設が希望ですか」といったアンケートをすると、圧倒的に図書館の意向が高いことがあった。文化ホールを建てた自治体で図書館がないところでは、次のハコモノとして図書館建設を求める意向は極めて高い。

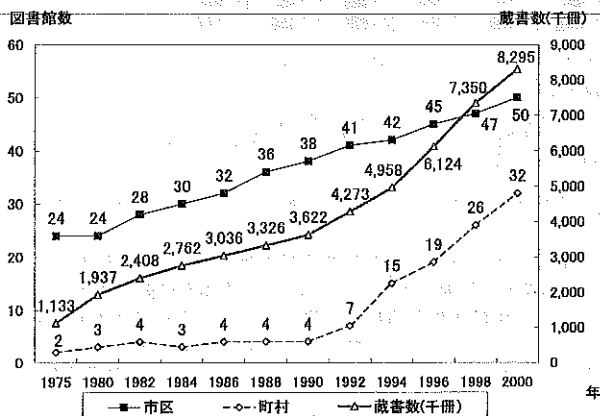
図書館利用は原則無料であり、毎年新しい図書を揃えていかないと魅力がなくなるため、一定の経常費を要する施設である。この図書館ブームの中で取り組まれている図書館ネットワークの状況と今後の図書運営について少し考えてみたい。この記事を読まれた方で、何か良い提案や助言をいただければ、ご連絡ください。

● 80年代は市設置、90年代は町設置ブーム

福岡県内の公立図書館（分館含む）の設置状況を市レベルと町レベルでみると、1975年には26箇所しかなかったが、1980年代には主に市の方に多く設置され、後の90年代は町レベルでの図書館建設が盛んになっている。

2000年3月末時点で82箇所（49市町村）に設置されている。2000年～2001年にかけて1市4町（山田市、嘉穂町、水巻町、豊津町、夜須町）がオープンする予定である。とにかく県内97市町村の過半数に

県内公共図書館設置の推移



図書館が設置されることとなる。

また、その蔵書数も1975年に1,133千冊であったのが、2000年には8,295千冊と7倍強になっている

● 県立図書館の相互貸出利用は年々増えている

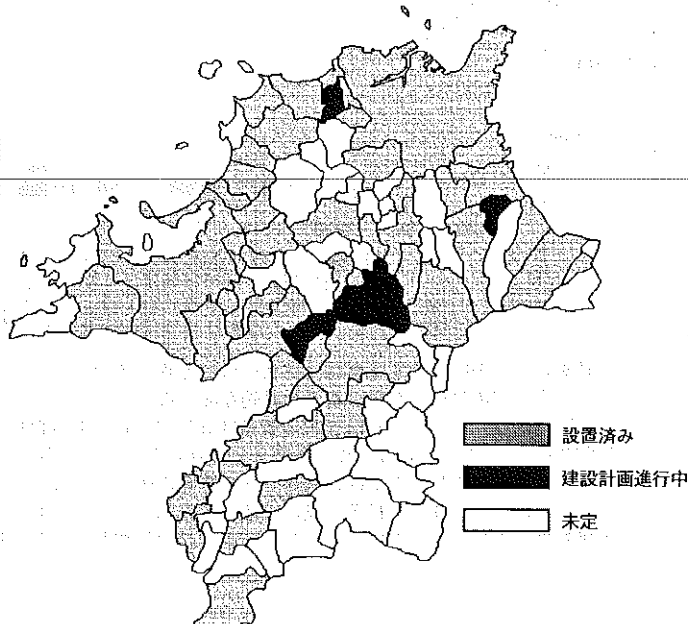
各自治体で図書館建設が盛んになると併せて、図書館の広域利用の取り組みも進んできており、現在、6広域圏で広域利用の協定が結ばれている。

図書館ネットワークといっても大きくは2通りあるそう。ひとつは利用者本人が広域内自治体のどこの図書館からでも直接利用が可能なもの（相互利用型）、もうひとつは利用者が居住している図書館で申し込むとネットワークを結んでいる図書館から当該図書館に送付されるといったもの（相互貸借型）である。福岡都市圏でも4月から相互利用型となり、都市圏内居住者はどこの図書館も利用ができるようになるそうだ。

このネットワークについて県立図書館の担当の方に、県立図書館のネットワークの取り組みについてうかがったので、主な事柄についてご紹介したい。

・現在、県立図書館では43施設の公立図書館、11の公民館内の図書室、大学などの施設5箇所の計59施設とネットを結んでいる

県内の公共図書館設置状況（平成12年10月現在）



- ・将来的には、各施設の図書をデータベース化し、相互に検索ができるようにしたいが、今は県立図書館の図書のみしか検索できない。
- ・県立からの貸出冊数及び県内相互貸出冊数とも伸びており、このネットワークシステムは、今のところ良く利用されている。
- ・送付するための自動車を貸出希望のエリアの様子をみながら、県立図書館の方で出しているが、拠点施設（例えば郡単位で拠点図書館があり、ここから別途送付してくれる機能）があるエリアでは、1週間程度で送付することも可能であるが、拠点施設のない地方の図書室では、届けるまで1ヶ月を要することがある。

サービスを充実させるのは良いが、これに伴い送付用の自動車と人を増やす必要があり、それだけ経費を要することとなる。このために、できるだけ拠点施設を増やす必要があるのと、どこまでのサービスを行うのかのバランスを考えなくてはならないように思った。また、送付に係る費用についても無料らしいが、多少の受益者負担をみてもよいのではないかなと思う。

●今後の図書館運営について考える

ここ10年間でオープン、あるいは改装した主な図書館の年間個人貸出冊数の推移をみると、オープンしてから2～3年後は、急激に貸出冊数が伸びるのであるが、いくつかの図書館ではある一定限度に達すると停滞気味のものもみられる。このデータをみると図書館もテーマパークと同じなのかも知れないと思った。つまり、新刊を入れ替えたり、各種教室や講座開催などの魅力づくりを行っていかないと飽きられる。つまり、図書館の魅力を保っておくためには一定の図書費等の経費を要するのである。

今後、財政的にも厳しくなる地方行政においてできるだけ財政負担を軽減させ、住民サービスとしても一

定の水準を保つような図書館運営を考えていくことがますます求められるように思う。

ここで少し極論ではあるかも知れないが、今後の図書館運営の方向性について述べさせてもらいたい。

〔図書の相互貸出というネットから、特色ある図書館づくりのネットワークができないか〕

多くの図書館では、住民サービスということでもベストセラーの新刊を何冊も揃えるところが見受けられるが、これは著作権の問題もあり、図書費高騰の原因にもなることから、これらの新刊の購入も含めてネットワークを組んでいる図書館同士で協議し、購入する図書を調整する必要があるのではないかな。また、図書館毎に特色を打ち出すことによって周辺住民がお互いに足を運びたくなるものにする必要があるのではないかな。例えば、それぞれ図書館毎に児童図書を充実させるところ、ビデオを充実させるところ、地域の郷土誌を充

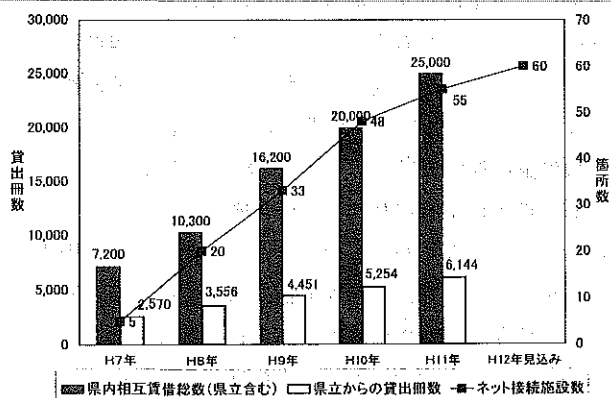
県内の広域利用の状況

広域利用の市町村	ネットワーク利用の内容
福岡広域都市圏	・相互利用方式 ・今年の4月1日より実施
筑紫野市、大野城市、太宰府市	・相互利用方式 ・希望図書の移送が可能
久留米都市圏（11市町）	・相互利用方式
久留米市、小郡市、鳥栖市、基山市	・相互利用方式 ・希望図書の移送が可能
嘉穂郡（8町）	・相互貸借方式 ・飯塚市の図書館は嘉飯山地域の居住者利用が可能
宇美町・志免町	・相互利用方式 ・希望図書の移送が可能

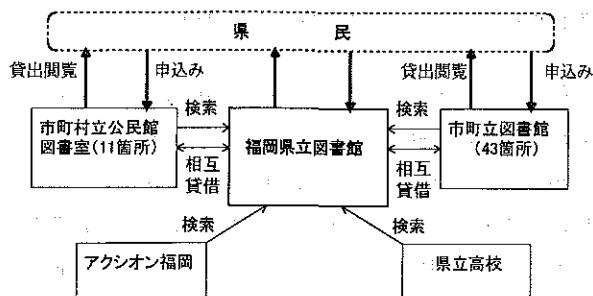
※相互利用方式：広域圏内の居住者自らがどこでも図書の貸出ができる。

※相互貸借方式：広域圏内の図書館及び図書室が窓口となつての貸出ができる。

県立図書館ネットワークでの相互貸出冊数の推移

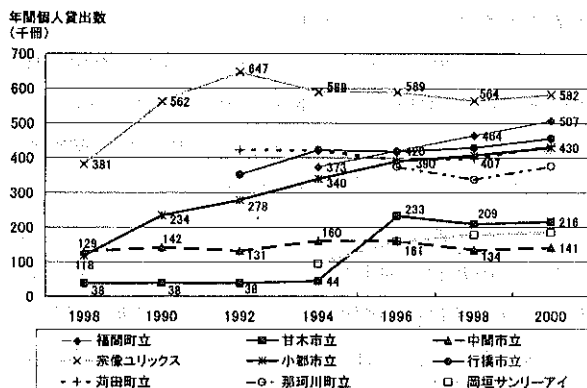


県立図書館の情報ネットワークのイメージ



※アクション福岡、高校などのその他施設等は5箇所

主な図書館の個人貸出冊数の推移



実させるところなど、住民にとっても分かりやすくすることで、図書館の特色づくりを行っていくことが必要ではないかと思う。

〔利用者の有料の枠を広げられないのか〕

図書館の場所にもよると思うが、図書館までの交通利便性の悪いところの人、あるいは図書館が通勤や通

学途中にない人は、なかなか図書館を利用しないように思う。私の体験から言えば、福岡市の東区に住んでいるので東区にある県立図書館は仕事の関係で時々利用することもあるが、早良区の百道にある市立図書館は全く利用したことはない。多くの図書館では利用する人、リピーターはかなり限定されるのではないかと思う。冒頭にも言ったように、現在、図書館ではコピーなどの自己所有物となるもの、図書の紛失など是有料となっているらしいが、原則は無料である。地域によっては図書館を使う人とそうでない人がいることを考えると受益者負担の考え方を導入してもよいのではないかと思う。例えば、図書カード作成などを年間500～1,000円程度で有料にしてはどうだろうか。これは現在の図書館法の拡大解釈になると思われるが、一度検討すべきではないかと思う。

(やまだ たつお)

ひともうけ通信5

老僧は「私のこの寺の住職の歴史は“過疎との戦いの歴史”でした」といった

——兵庫県上郡町・万勝院 新見龍童住職——

糸乗 貞喜

●この頃、クリーン・複合汚染・省エネ・定住構想などがテーマになり、大規模開発一辺倒ではなくなっていた

1981年の秋頃だったかと思う。私は西播磨テクノポリスの、基本構想づくりへの取り組み方について迷っていた。

テクノポリスという事業は、全国で2～3カ所のつもりが、各県からの誘致合戦になっていた。社会風潮は、オイルショックを受けて「自然を大切に」という気分になっていたが、地方自治体はまだ開発指向が強かった。今でも言えることではあるが、当時はもっと地方自治体とマスコミは離れていた。開発面積が2,000ヘクタールを超す事業ということになれば、い

ずれ世論に対する対応も、必要になると考えていた。開発地区の中心辺りに、兵庫名勝百選とかになっている“ボタン寺”があるのが気がかりだった。現地の町役場に行った時に、私が最初に聞いたのもその事だった。確か「うるさい住職がいる」ぐらいのことしか言われなかったように思う。「あの寺が、このプロジ

ェクトにどんな態度をとられるかが、気になりませんか」というてみたが、誰も反応しなかった。

私は丁度その頃、大阪で取り組んでいた都市再開発事業の、権利調整が一段落した頃であった。その事業は300戸のクリアランス(除却)を伴って、900件近い権利数があった。それからみると、面積が2,000ヘクタールといっても、合意形成の対象としては大した数ではないのかも知れないが、それでも中心に名勝があるというのは気がかりなことではある。

役場が問題を捉えていないのなら、私の最初の仕事は、そのボタン寺の住職の会うことだと考え、地元

の役場の担当の方をお願いして、住職に会えるようにコンタクトを取っていただいた。約束の日、かなり緊張して役場に出かけた。もちろん変に刺激的な状況になってはまずいので、役場の担当の人と2～3人で会うつもりである。ところが、役場には十数人の人達がいた。「今日何か?」と尋ねたところ、「万勝院に行くんでしょう」と返事が返ってきた。「全部?」、「そうです」となって、唸って



この左手前にあるのもボタン。この左側から奥へボタンの花がざっしり咲く。

しまった。

このクライアントの皆様方とは、ほとんどは初対面で、担当の人とも二度目だった。ボタン寺の環境問題になりかねないことを話し合うために、気むずかしいといわれている住職との初対面の対話には、そぐわない状況である。「帰ってくれ」ともいえず数台の車に大部隊が分乗して出かけた。

●老住職は戦前からの、地域づくりの先輩だった

小さな寺だった。庫裏とつながった広い部屋に、十数人が正面を向いて待っていると、老住職が奥さんに支えられるようにして、前屈みで、小さい歩幅で、というよりその一步はフットサイズ以下のあゆみで、出て来られた。私はいよいよ緊張した。その足取りを見ながら、「こんな大勢で来るのではなかった」と後悔していた。正面にソッと座られて、こっちを向いて「……」という状況になった。

私はもう腹をくくっていた。とにかく、まともに話をしようと思って「私達は、地方の科学技術を進めて、産業振興を図ろうとするテクノポリスという事業の、基本構想を作ろうとしています。ついてはその計画地域の中心にある、万勝院のご住職の意見を伺うのが第一番だと考えて、ここに伺いました」と言った。ややあって、最初に出た言葉が「私のこの寺の住職の歴史は“過疎との戦い”の歴史でした」である。一瞬、私も「……」となったが、次に「それはまたどうのことですか」と言っていた。ここで私の緊張は解けた。このあとは住職の話の聞き上手になればいいのだ。以下、かいつまんで紹介する。

●ひとりで牡丹を植えて、牡丹の名所をつくろうと思った



老僧の話を聞いた本堂。もちろん、こんなに手入れはされていなかったように思う。

ここの住職になったのは昭和元年で26才の時だった。戦後、農地解放以後この寺の周辺には、20戸足らずの農家があったが、高地でもあり(標高300~350mぐらい。そのため抑制栽培になっている。)、うまくいかなかった。一度サヤエンドウを作らせて神戸の市場にもっていったところ、これならいくらでも持って来てくれと言われた。

しかし、なかなか農作物がうまく穫れなかった。富有柿もやったし、いろいろな作物を作ったが、だんだん戸数は減っていった。観光で人を呼ぼうと思って、紅葉を植えさせようとしたが、ついてくる人は少なく、うまくいかなかった。

農作物はうまく穫れず、農家は減って、過疎地になっていった。それでもめげないのがこの住職の本領なのだが、ひとりで牡丹を植えていった。それは昭和30年ごろのことである。もともと牡丹は少しあったらしいが、35年ごろになるとかなりの牡丹が見られるようになり、ボタン寺の趣を呈し始めていた。

住職は、新聞社などへのパブリシティに熱心で、いつも記者達が牡丹を見に来ていて、いっぱい飲んだりしていた。その極め付きの話がある。

「ほとんど誰もフォローしてくれなかったが、なんとか名所にしようと思っていたところ、読売新聞の“兵庫名所百選”のコンテストがあった。これに何とか選ばれたと思い、自分ではがきを沢山買って、知り合いを訪ねて、万勝院への投票を頼んで回ったのです。」

ボタン寺と同時に、精進料理も始めた。

こんな話を聞き、いろいろな地域づくりに取り組んできた私の話も聞いていただき、かなり親しみを感じ



万勝院の入口のたたずまい。昔はもっとさみしかったように思う。

るようになって、「今後もご意見を伺いたい」という話で終わって、寺を辞した。

●この住職は、なぜか近隣からの評判が極めて悪かったが……

まずは、友好的に話が終わって、一安心というところだったが、地元の役場での評判は良くなかった。その原因の大半は「タダみたいな材料(野の草や畑の野菜)の料理で6,000円も取る」という精進料理にあった。私がいつも、「いやあ、それがいいんですよ」言っていると、こんな話がでてきた。

「実はこんな話があります。万勝院の麓の村(集落)出身の人が神戸にいましてね。次男なんですけど……」
 といって、話してくれた。

その次男の人が、町内会の体育振興会かなんかの、年度納めの“ツアー兼お食事会”の行き先に、万勝院とその精進料理を奨めたことがある。経緯は毎年同じような所ばかりになるので、どこか変わった所に行こうということになったのだが、なかなかいい所も思いつかず、会議がもたついていた。つい「私の里で、精進料理を食べさせる寺がある」といったところ、皆が「それがいい」ということになり、決めてしまった。そのことを里の兄に連絡したところ、兄から「それはえらいことになったな、あの寺はろくなものも食べさせずに、高い金を取るの、近在では評判がひどく悪い。みなさんに言って場所を変更してもらえ。こんな酷いところを紹介したら、おまえはその街に住んでおられなくなるぞ。」と言われた。弟さんは驚いて、町内会の人に「うっかり評判も確かめずに、精進料理の話を出してしまったが、どうも酷いところらしいので、変更して欲しい」と申し入れた。「気にせずに一応行くことにしよう。もし悪かったら、決してあなたの責

任ではない。みんな行き先に困っていたんですから」ということで、みんなして出かけた。

結局は、自然も豊かで、精進料理もおいしく、大喜びで「毎年ここに」という話も出たくらいだった。

田舎の人は、買ったものでないと、もてなしにならないように思う人がいるが、その里のモノの方が喜ばれた、という話である。住職は、こんな精進料理を、昭和30年代から始めていたのである。

●二十年ぶりに万勝院を訪ねてみた

去年、二十年ぶりに訪ねてみた。テクノポリスは放射光施設もできて、動き出していた。

テクノポリスの計画についてふれると、私の仕事は一年だけで、二年目にクビになってしまった。コンセプトについて県庁の人と意見が合わなかったからである。私は事業ができるまでにかかなりの期間がいるので、「今からシリコンでもないのではないか、もっとソフトな分野に、大学も文系にも焦点を合わせるぐらいでないと」などと言ったので、逆鱗に触れて外されてしまった。担当の方に「本省(通産省)が、これからはシリコン産業だといっているのに、全く勉強していない」と言われて落第となった。

反論まではしなかったと思うが、「自分の思っていることを言う」という欠点は、昔から今も治っていない。

そんなわけで、二十年ぶりの再訪であった。万勝院への道はクルマが一台やっと通れるくらいで、テクノポリスの開発事業とは関わりが無かったように見えた。本当のところ、私の気持ちは、このような精進料理を食べさせるボタン寺は、テクノポリスにとって好ましいものだと思っていた。

誰にも聞かなかったが、テクノポリスの計画と住職の考えは合わなかった(もしかしてケンカでもした)のかも知れないとも思ったりした。

今の住職(新見知章さん)にお会いした。先住の養子だとおっしゃった。

老住職は、昭和62(1987)年に亡くなっておられた。私のお会いした5~6年後のことである。昭和元年に28才だったということは、1901年のお生まれだと思う。

この寺は、もともと八か寺三十三坊あったところで、池田光政の寄進になる広大な荘園を持っていたが、檀家ではなく小作だったので、戦後は経済的にも大変だったようだ。老住職が農業に熱心だった理由は、戦前

の農業会長（今の農協の組合長）をしていたからで、明石農試から米の作り方なども聞いてきて農家に教えたりしていた。

老住職の評判が悪かった意味を、もうひとつ見つけた。先述の通り、ボタン園を育てたのだが、ここには5万人／年も来ているといわれていた。本当のところは1万人未満だったらしいが、入場料を一人500円取っている。それに駐車場代もある。料理も高い。「欲深い」と思われたのだと思う。実際の所は、「ボタン園の手入れの人夫賃と、駐車場のアルバイト代が要って、武家の商法だったですよ。ただ、会計は、税務署に教えられて、ボタン園と料理は有限会社にしました」ということである。

もう一度会いたい老僧だった。「テクノの人が食事をさせたいといった時、ことわったりしていた」らしいが、都合がつかなかったのか、相性が悪かったのか。

二十年前の思い出である。去年万勝院で、「南無阿弥陀仏」といつてきたが、もう一度「合掌」。

（いとのり さだよし）

第3セクター研究会・第65回地域ゼミ
まちの人に「こころ」と「元気」の産直を！
浮羽町企画振興課 瀧内宏治さん

尾崎 正利

●元気の産直。平均週1回やってくるお誘いFAX、Eメール

福岡県浮羽町は平成7年全国に先駆けてグリーンツーリズム地域に指定された自治体の一つである。指定されたのち、棚田オーナー制度や農家民宿、地域を舞台にした写真撮影会、集落おこしの法人組織づくりなど様々な取り組みを進めてきた。

しかし、近年は同じような取り組みで活性化を図る地域も増えており、農山村地域同士が競合するようになっている。これを勝ち抜くには、より効果的な情報発信と売り込みを必要とする段階になっている。

私たちの事務所に浮羽町役場からFAXやメールが届く。内容は町内の元気情報や遊びごとについてのお誘い情報で、これが平均週1回、多いときには週2～3回。受信時刻が夜11時半という日もある。

内容は浮羽町内で行われる炭焼き、造り酒屋の蔵開き、柿マラソン、もぐら打ちなどの参加のお誘いや、

新聞で取りあげられた浮羽町関連の記事が主で、今年1月4日に送られてきたEメールは「2001年農業カレンダー」と書かれている。

まるで浮羽町の「元気」の産直のようだ。

今回、第3セクター研究会と地域ゼミの合同開催で、「地域経営」という視点からみた浮羽町の取り組みについて勉強することになった。FAXやEメールの発主である浮羽町役場企画振興課の瀧内宏治さん（本誌48号で棚田オーナー制度の記事でも紹介）にお話いただいた。お話の要旨をまとめると以下のようになる。

●情報は生もの、自分で得ている情報を最も早いからで

- ・瀧内さんは浮羽町で生まれ育ち、高校を卒業して東京で4年間過ごした。卒業と同時に浮羽町に戻って町役場に就職し現在に至る。大学在学中は広告業に興味を持って勉強していた。
- ・町役場に就職した頃、浮羽町ではグリーンツーリズムをテーマに町づくりを進めようとしていた。当時の高木典雄助役（現九州地方整備局建設専門官）、今村清係長（現JAにじ職員）が積極的にリードしていたが、間もなく任期を終えて町を離れていった。
- ・そのとき、地元でも棚田オーナー制度、農村集落で発足する飲食サービス拠点づくり、集落の人々による様々な取り組みが始まりつつあった。そこで、グリーンツーリズムの旗揚げの時だけでなく、どうやって町役場が継続的にそうした活動をサポートできるか考え、人々に注目してもらうための情報提供をはじめようとした。
- ・情報提供について「地元を受け入れ体制ができるまでPRを先走りしてはいかん」とか「いや、まず来ていただくことが大事だ。過剰宣伝は避け、実際に都会の人に来てもらってから、その中で問題解決していこう」など、様々な意見が地域、町役場の中にみられた。
- ・しかし、実際に浮羽町の農山村に都会の人が訪れて、地元の人と直接接触する機会をつくると刺激になることが多かったのも、結局「走りながら改善点は考えていく」方法で動いている。
- ・情報発信は、情報の新鮮さ、継続性を大事にしたいという考えから、「町役場の瀧内さんが発信している情報」ということが一目で分かるようにして始めた。

・こうした業務は本来の役場の仕事の「外」という要素を多分に含んでいる。現状では瀧内さんの情報発信に係る取り組みは町役場の内部では業務として認められているが、例えば、夕方以降にFAXやEメールを送る作業をもっと簡略化し標準化することが必要となっている。

- 「田舎の役場は地域の中で若い職員を一番多く抱えています。地域の売り込みや宣伝は、役場職員の義務ではないでしょうか」

今回の研究会の参加者は行政マン、会社役員、大学の先生、地域づくり活動に関わる人、農家など様々であった。質問の中に「情報発信して人に来てもらう効果はどのあたりにあるのか」というものがあつた。

瀧内さんから、例として棚田オーナー制度のケースの説明がなされたが、効果の一つは取り組み自体の話題性やイメージの良さが出来た米の値段に反映された点、そしてもう一つは米以外の農産品について、知り合いになった都市部の人の紹介や宣伝で直接注文が農家に行くようになり、宅配便での販売が急増した、と

いったことが挙げられた。

瀧内さんは「町役場で働いて8年目」という。私と同世代である。そこで「なぜそこまで頑張るのですか」と気になっていた点を聞いてみた。すると、返ってきたのが見出しに挙げたような言葉であつた。

たしかに農山村地域において、体力ある若い人が一番多く残っている職場のひとつは自治体である。

「人材もお金も持っている行政が頑張らないと……」と瀧内さんはいふ。地道かつ地味な活動だが、自分の町が知られることで少しでも効果がみられたことが何よりも嬉しいという。

地元の人と会い、これは資源だと確信できるものを、自分の手で情報として流すことは確かに思い入れがないと魅力のあるものにはならない。

こうした自治体職員の「思い」を今後も地域の行政の中でどう位置づけるか、そして、どのように評価して地域に根付かせるかがこれからの課題だと思われる。

(おぎまさとし)

浮羽町の歴史文化を今に伝える魅力的な地域資源となりうるか

～浮羽町山北の河北家～

小田 好一

河北家は、福岡県浮羽町山北に居を構えて約500年にもなる名家である。現在、この河北家の当主である宣正さんは27代目である。現在の母屋は明治期、土蔵は江戸期に建てられている。これらの保存活用を考えたいということで、去年の夏頃にはじめてお会いした。

- 河北家をどのように保存活用していくか

敷地約2,000坪のこのお屋敷は、母屋といくつかの土蔵からなっている。しかし、いずれも年々傷みがひどくなっており、年間何百万もの修理費がかかっている。よかネット2001.1(49号)では福岡県川崎町の「魚樂園」について触れたが、魚樂園では、入園料を徴収している他、顕彰会(ファンクラブのようなもの)をつくり、会員を集め、会費を募っている。また、地元企業から出資金を募っており、行政に頼ることなく、民間の力で積極的に保存活用を進めている。歴史のあ

る建物を次世代に残すためには、何とかして維持・管理費の捻出を図らなければならない。即ち、お金を落とすシステムが必要である。

河北家の建造物で問題になっているのが、高額な修理費である。瓦の葺き替え、漆喰の塗り替えなど、傷んだ箇所を部分的に修理しているため、かえってコストがかかっていることである。一度、大規模な修理をして、しばらくは修理の必要がない状態をつくっておきたいところである。

伝統的建造物の修理について、魚樂園では国指定名勝のなかに建っている建物ということで文化庁の補助



何百年ものあいだ、大自然にひっそりとたたずむ河北家



「壁結い（かべゆい）」のようす（平成7年3月）

事業である「史跡等保存整備事業」が適用され、大修理を行った。

このほか、国の選定する重要伝統的建造物群保存地区内であれば、伝統的建造物の修理に際して、自己負担が伴うが、最大800万円までの補助が受けられる。しかし、河北家のように民間所有でかつ、1世帯のみの伝統的建造物の修理には適当な補助事業がないのが現状である。

現在、河北家のお屋敷は国の登録文化財の指定のための手続きを進めている。顕彰会などをつくる際、河北家の保存活用の価値を示すための国のお墨付きをとするのが目的である。また、地価税の1/2の軽減、固定資産税の1/2以内の軽減などの優遇措置がある。これよりもさらに税制面で優遇されるのが国指定重要文化財であるが、活用の際に家屋内の改変が全く認められないため、適当でないと考えられる。

河北家に代々残るものは建物だけでなく、年間を通して行われる行事がある。河北家独自で行うもの、周辺の神社で行うものがある。そのなかでも、大がかりな行事に「壁結い」がある。屋敷周辺の集落の方や親戚の方が集まって河北家の屋敷周辺をとりまく竹垣を丸一日かけて結っていく行事である。年々、参加者が少なくなり、高齢化しているため、行事の存続が危ぶまれている。参加型のイベントと捉えて、飛び入り参加できるようなシステムをつくることも検討していくことが大切だろう。

●反近代化主義こそ伝統あるものが守っていける！?

浮羽町は名水の里としても有名で、隣接する星野村との境に清水寺があり、1日に700m³の水が湧き出る池がある。ポリタンクをもって遠方からも水を求めてやってくる。

河北さんはこの清水湧水の保存会会長を務めている。最近になって、立派な水汲み場と駐車場が整備された。これによってさらに客が増えた。しかし、客が増えたことにより、なかにはゴミを散らかしていく客など、マナーを守らない客がおり、水汲み場の整備によってかえって、「清掃」という仕事が増えたことを嘆いていた。河北家の保存・活用についてもそれを最も心配されている。

最近の観光資源の整備には駐車場整備がほとんど不可欠と言っているほどになっている。車が進入することによって、かつての景観や静けさ、自然への影響など、犠牲になっているものを忘れがちだ。「昔の環境を守るためには駐車場なんてすぐ近くにつくらなくて、5分ぐらい歩いてもらっても、ばちはあたらんと思うとですよ。」と河北さんはおっしゃった。

このほか、河北さんのお屋敷の近くまで来ると、車が離合できないほどの幅の道やカーブがあり、玄関へとつながっている。これについても「道幅を拡げてアスファルトで舗装することが環境の整備になるとは思っていない。」ということだった。確かに昔からの竹垣のある風情のある景観が守られている。

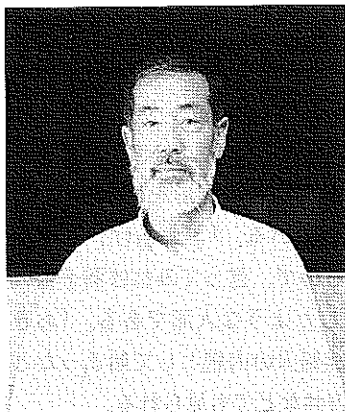
このほか、河北さんの「反近代化」のこだわりは家中の生活にも現れている。冷房はなし、暖房はほとんどつけない。蚊や蠅などの虫除けのための網戸はつけない。蚊帳もない。蚊については「蚊を避けようとすると刺されます。蚊と共生しようと考えたら刺されない。」ということだった。

また、屋敷内には小さな畑があり、農作物をいろいろと育てているほか、この時期ではタケノコ、タラの芽などのほか、食べられる植物についてもよくご存じで、自生しているのを採ってきて天ぷらなどにいただこうだ。「1ヶ月の食料費は約5,000円です。」なるほど、食生活も反近代化している。反近代化こそ、伝統あるものを守っていける秘訣かも知れない。

●保存・活用のアイデアはいろいろあるが・・・

河北家は歴史ある浮羽の豪農というより、画家の青木繁を発掘した美術評論家「河北倫明」の生家としての知名度が高い。

河北倫明といえば、美術史家、美術評論家、美術館人として、それぞれの分野で優れた業績をあげた人として知られている。また、河北家の土蔵には多くの美術品が残されている。さらに、多くの書物、民具など、



27代目当主
河北宣正さん

この家に正式に住むようになって数年しか経たない河北さんも全ては把握していないそうである。「毎日が、ディスカバー『自分の家』ですよ。」という言葉が印象的だった。

単に展示をするだけの美術館、史料館では展示品の定期的な更新が必要であるほか、収蔵法についても気

を使わなければならない。その上、リピーターを増やせるかは疑問である。

河北家には三方を庭に囲まれたお座敷がある。敷地内には3本の小川が流れており、5月頃になると、ホタルが出て、このお座敷からの眺めは最高だそうである。このような自然に囲まれて、食事または菓子・茶などを楽しむことができれば、一層魅力的なものになるだろう。

このように、アイデアは色々出るが、本当に採算が取れるかどうか、個人の所有なので、失敗したときのリスクを考えるとなかなか踏み出せないのが、現在の状況である。現在は、できるだけ多くの同様の事例を見て回りたいと考えている。事例をご存じの方や事業手法についてアイデアのある方はぜひ御連絡を。

(おだ こういち)

ひなまつりが各地でイベント化

伊藤 聡

ここ数年、ひなまつりを地域のイベントとして行っている所が目立ってきた。九州内でもひなまつりの時期に名前が聞こえてくるのは、福岡県では吉井、八女、柳川、大分県では日田、中津、熊本県では人吉、そして今年から佐賀市が加わった。

各地のひなまつりはそれぞれに歴史と地域性を出し、取り組みに特徴を持たせようとしている。今回、所員でひなまつりを巡ってきたので、その紹介と、なぜひなまつりなのかについて考えたい。

●九州では最も早く取り組んだ日田

日田はひなまつりのイベントを始めて、10年以上になる。九州のひなまつりの中でも最も早い。日田は元々天領であり、豆田地区などに古いまちなみが残っていたが20年くらい前までは寂れていた。倉敷で古い家屋に代々のおひなさまを飾ったのが話題になったのをヒントに、昭和60年頃、日田の草野本家でおひなさまを飾ったところ大きな反響があり、年々おひなさまを出す家が増えていった。

数年後にもうひとつのまち隈地区でもひなまつりを始め、面的な拡がりになる。また、古い家屋に飾るだ

けではなく、商店のショーウィンドウでの飾り付けや、ひなまつりにちなんだ小物の販売など地域全体でのイベントへ発展している。

現在日田は豆田のまちなみを中心に、年間250万人が訪れる観光地となっている（今年は昨年サッポロビール園ができた影響で300万人を突破しそうな勢い）。ひなまつりの来訪者は1ヶ月半の期間中に約15万人である。

●めぐることに力点を置く吉井

白壁土蔵のまちで知られる吉井町は、日田市と久留米市の中間にある宿場町で、日田市の影響を色濃く受けている。ひなまつりを始めてからは9年目である。

吉井町は「小さな美術館めぐり」として、古い町屋や店舗、喫茶店などまちのあちこちをギャラリー化し、



柳川の「さげもん」



押し雛の別名と言われる「おきあげ」(手前)と「箱びな」

うろうろ歩いて見せるイベントを中心に人を呼んでいる。ひなまつりもそのスタイルに乗り、イベント名も「おひなさまめぐり」としている。

他の地域でも古いまちなみを活用したひなまつりが多く、それをいかに商店街等に呼び込むか、という課題を抱えているが、吉井の場合は古いまちなみと中心街が一致しているという利点がある。

●さげもんと水上パレードの柳川

堀割の川下りで有名な柳川は、旧立花藩の城下町である。立花家の古いひな飾りもひとつの見どころであるが、柳川のひなまつりの特徴は「さげもん」である。さげもんとは、鞆や小袋などの小物を7つつなげて吊したもので、下からの雛壇と上からのさげもんでにぎやかな飾りである。

柳川はひなまつりを始めて7年目であるが、伝統的には「つり雛」と呼んでいたものを、7年前に「さげもん」と呼称を変えている。

3月中旬の休日に「お雛様水上パレード」として、一般公募の女兒50組が赤い着物を着て川下りを行う。これが絵になるということで、期間中でも最もにぎわうイベントとなっている。柳川ならではの、川下りとおひなさまの組み合わせである。

1ヶ月の期間中の来訪者は10万人あまり。通常の月の来訪者は約5万人であり、2倍の観光客を呼んでいる。

●ひな人形の産地の八女

八女も古いまちなみが多く残っているところであるが、元々仏壇の産地であることが様々な伝統工芸等に活かされ、この時期でいえば九州で唯一のひな人形の産地である。しかし「雛の里・八女ぼんぼりまつり」として行うのはまだ4年目である。それでもまつりに

合わせて何らかの飾りを出す家や店舗は、1年目に80軒であったのが、現在では130軒になっている。期間中の来訪者は5～6万人である。

八女で特徴的なのは、「箱びな」と「おきあげ」。「箱びな」は木箱に入ったまま一对の人形を飾るもので、箱には簡単な飾りが付いている。「おきあげ」は押し絵を竹串で立てているもので、言ってみれば羽子板の飾りの部分だけ取り出したような人形である。「おきあげ」は久留米藩の士族婦人の内職として始まったと言われており、日田や吉井などでも見られる。

●鍋島藩と和菓子のひな飾りの佐賀

佐賀市は今年はいじめて「佐賀城下ひなまつり」として開催した。鍋島藩の城下町であり、長崎街道の古いまちなみや旧古賀銀行などの近代建築の建物に、鍋島氏代々のひな飾りや、和菓子のおひなさま、鍋島小紋のおひなさまなどを飾っている。

佐賀市はこれまで観光地としての売り込みをしておらず、通常は観光地として認識されていなかったところが他の地域と違う。それでもテレビのニュースなどで反響があり、期間中約4万人が訪れた。

今年は何のくらの人が来るのか未知数であったため、市民や商店街などは様子見の傾向が強かったが、来年からは地域への拡がりも出てくるだろう。他の地域も1年目は賛同者が少なかったそうだ。

●圧倒的に女性、特に中高年が多く、男は手持ち無沙汰

ひなまつりに行くと、歩いている人のほとんどは女性である。中高年が多いが、日田や柳川など若い女性やカップルがだいぶ見受けられるところもある。

佐賀市で来訪者にアンケートを取った結果では、全体の8割が女性であり、そのうちの6割が50代、60代であった。佐賀市ははじめてなのでまだ浸透していなかった面もあるだろうが、他の地域に比べて来訪者の年代がやや高かったように思う。

男性はたいてい運転手として付いて来ているか、奥さんに引っ張られて来たかで、カメラを抱えて手持ち無沙汰にしているのをよく見かけた。

そもそも女の子がメインの行事であるし、相手は人形なので、男性が積極的に興味を持つというのも難しいところだろう。私も一人でおひなさまを見るのは気恥ずかしくて、いかに「取材です」という振りをするか考えていたが、それでも見ていれば面白かった。

●地元への効果

ひなまつりをイベントとして行うことの効果として、ひとつは日田などでみられたが、古い家屋とマッチすることで、まちなみを残そうという動きにつながっていることがあげられる。

また、吉井のおひなめぐりに代表されるように、回遊性のある仕掛けをすることで中心地に人の流れができ、にぎわいづくりとなっている。ただ、どこまで歩くに堪える楽しみを用意するかが課題だが、日田では歩く先に酒造があったり、柳川では北原白秋の生家があったりという風に、目当てになる何らかのポイントが必要と思われる。

消費面では、おひなさま弁当を出したり、小さなひな飾りを売るなど商売につなげる動きは盛んである。佐賀市の調査では、食事・お土産・その他で客単価は約3,000円であった。佐賀市はお土産などの消費できるものがまだ少ない中での金額であるため、年数を重ねた他の地域では単価がもう少し上がるのではないだろうか。

その他、柳川ではおばあちゃんが喜んでさげものの飾りを作っていたり、八女では観光ボランティアの方たちが自慢げに説明してくれたり、地元の人の楽しみにもなっているようである。

●なぜ今、ひなまつりか

ひなまつりは、元々節句のひとつとして各家庭あるいは地域の行事として行われていたもので、知らない人に家のひな飾りを見せるような、観光の対象ではなかった。

しかし今は、工芸品や食品加工の工房、田舎の生活など、体験も含めて日常の様子を見せていくことが観光の大きな要素になっている。商店をはじめ一般の家庭でもひな飾りを見せているというのは、「あそこはどんな飾りだろう」と他人の日常を覗く楽しみみたいなものを刺激しているように思う（といってもひなまつりは非日常か）。

もちろん、天領日田や立花藩、鍋島藩などに伝わるひな飾りの豪華さや緻密な細工は、コレクションや芸術品としての面白さが十分にある。生活用品一式がミニチュアで作られ、幅1cmもないくらいの小さなカードに百人一首が絵入りで書かれていたりする。

中高年の女性がノスタルジックな気分で見に来る、というのは多分にあると思うが、少し違った見方をすると、核家族化の影響と住宅問題があるのではない

だろうか。核家族化と少子化によって、中高年の女性の身近に女の子が少なくなり、ひな飾りを見たりお祝いしてあげたりする機会が減っているのではないか。さらに、狭い住宅に住んでいるところでは、あっても小さなひな飾りで、7段飾りなど置く場所もなく、大きな飾りを見たい、あるいは子どもに見せたいという気分が働いているのではないか。

もうひとつ、桜よりも一足早く春を感じられる行事だということもあるだろう。3月8日を過ぎても片付けるところか、長いところでは4月始めまで飾っているのでもいい加減なものではあるが。

こう、ひなまつりが各地で行われると、客を食い合うのではないかという気もするが、JR九州でも各地のひなまつりを一緒に宣伝しているし、実際にひなまつりのハシゴをしている人もいようだ。現在、オブザーバーも含め冒頭の7地区でひなまつり協議会を作っている。当面、ネットワークを組んで、春先にはどこかのひなまつりに来るように、さらにはハシゴしてもらうように盛り上げていく、という取り組みになるだろう。（いとう さとし）

自分で作ったお菓子の味は格別なもの

～佐賀和菓子作り体験

梶原 里香

久留米地域の地場産業振興のための調査を今年もお手伝いすることになり、その業種の中に「お菓子」が入っていたことがきっかけで、JR九州の企画で、佐賀市の村岡総本舗で行われている「駅長おすすめの佐賀和菓子作り日帰り体験の旅」に参加してきました。

●参加者は圧倒的に20歳代の女性が多い

この日の参加者は全部で16人。そのうち男性の参加者はたった2人（当社の山田と夫婦で参加のご主人）でした。14人の女性もほとんどが20歳代で、参加者は年輩の人が多いのではないかと私たちの予想を裏切るものとなりました。

村岡総本舗のこの企画の担当である大塚さんにお話を聞いたところ、JRからこの企画の話を受けたときに、お店に来られるお客様は主婦が多いこと、また年輩の人の方が自由な時間のある人が多いのでは、ということから参加者は年輩の人が中心になるだろうと予



先生が近くに来てていねいに教えてくださる

想をしていたそうです。しかし、昨年10月からの半年間の参加者559名（子どもの料金設定がないため、子どもの数は除く）のうち、なんと80%が20歳の女性、年輩の人の参加は10%程度であるとのことでした。ただ、何度も参加されているのは年輩の人の方が多いそうです。

●お菓子づくりに美的センスは欠かせない

この日、私たちを指導してくださったのは村岡総本舗の大蔵登一さん。大蔵さんともうお一人、2人で交代で講師をしておられるとのことでした。

まず最初に材料についての説明を受けました。その説明は以下の通りです。

- ・あんー白あんでお菓子の基本となるあん。「てぼ」という白いインゲンを使う。この「てぼ」は豆自体にくせがないのでお菓子に使いやすい。一般的に市場に出回るものではなく、価格は60kgで約4万円。強火で練り上げてあんに空気を入れることでサクツとしたあんができてあがる。
- ・外生地（あんを包む生地）ーあんを包みやすくするため、あんに求肥（「ギユウヒ」と読む。もちの粉）を入れあんよりも少しねばりけを出している。
- ・きんとんーあんに水あめを加えてやわらかくする。

これらの材料はすでに村岡総本舗の方で作ってあったので、私たちはそれを使ってお菓子をかたち作るところを体験しました。

この日作ったお菓子は全部で6種類。あんと外生地を使った「水仙」「梅」「桃（果物）」「菊」と、あんときんとんを使った「菜の花」「早春」です。外生地をひらたくのばしてあんを包み込む、網でこしたきんとんをあんのまわりに飾り付けていく、という2つの作業を行いました。



今回作った6個のお菓子

外生地をひらたくのばさないと、生地が薄いところできてあんがはみ出てきます、という注意が先生からありましたが、私はなかなかコツがつかめませんでした。何より一番難しかったのは「桃」の形を作ること。先生が机を順番にまわって間近で見せてくださったのですが、私の場合、結局本物の「桃」にはほど遠いものとなってしまいました。上手にできている人を横目で見ながら、自分にもう少しセンスがあったらうまいっていただろうな…とってしまいました。

●お抹茶を飲みながら自分で作ったお菓子を味わう

お菓子を作り終わるとお抹茶を飲みながら、自分の作ったお菓子をその場で味わうことができます。企画が始まったころは作った6つのうちの1つを食べながらお抹茶を飲むことにしていたそうですが、実際に食べたのは夫婦が1組、それも2人で12個作ったうちの1つを半分ずつ食べただけ。確かに作ったお菓子をプラスチックのケースに入れ、箱に並べたものを見るとそこから1つだけなくなってしまうというのは何だか寂しくて、食べるのが惜しくなってしまいます。そこで講師のお2人が社長にお願いしたところ、その場で食べるために1つ余分に作ることを了承してくださいとのこと、今回は7個作ったうちの1つをお抹茶を飲みながらその場で食べました。食べるために作ったものとはいえ、何だかもったいなくてなかなか手をつけることができませんでした。自分でいうのもなんですが、味は格別でした。

●家では和菓子を作ろうとは思わない。だからこそ経験してみたい

私も家ではクッキーやケーキなどの洋菓子を作ることはありますが、和菓子を作ることはありません。実家で祖母がよくおはぎやかかしわ餅を作ってくれていま

したが、何よりもあんを作るのが大変そうというイメージが私の中には残っています。一番大変なあんを作るところは村岡総本舗の方でしてくださっていたわけですが、2時間でめったに作ることもない和菓子作りが体験できる、という手軽さが若い女性に人気がある秘訣なのかなと思いました。この日の参加者の中には長崎から参加しているという女性の4人グループもおられました。また、ちょうど佐賀市でひなまつりが行われていた時期だったこともあり、これが終わったらそちらを見てまわろうと思っています、という方もおられました。

この佐賀和菓子作り体験は博多駅を基点とする場合、

西南学院大学ブランドのお菓子の のはなし

山田 龍雄

久留米・筑後地域の地場産業振興のための調査で、お菓子のことを調べているうちに西南大学の先生から大学ブランドのお菓子があるという情報をつかみ、早速このお菓子開発に係わってきた元大学生協の責任者の方に開発の経緯や効果などをおうかがいした。

●開発のきっかけは九州大学の「イモ九」から

平成5～6年頃に九州大学出身であった如水庵（じょすいあん）の社長が、九州大学の何かの集まりの時、大学生協に九州大学ブランドのお菓子開発を持ち込んだのが大学ブランド菓子の始まりだそう。

今、この九州大学ブランドのお菓子は、昔、九大の学生が「イモ九」と言われていたことから、イモをテーマに開発し、今、九州大学の生協で販売されている。この話がきっかけで、2年後の平成7～8年頃に如水庵が西南学院大学に大学ブランドのお菓子づくりの企画を、九州大学と同様に大学生協に持ち込む。しかし、この当時生協の責任者の方は生協だけの話ではなく大学全体の取り組みとした方がよいと判断し、大学の広報課に相談したところ、トントン拍子で開発の方向になったらしい。

現在、西南学院大学は学生数約8,000人と福岡でも有数の私立大学であるが、やはり今後の少子化に伴う大学間の競争に備え、少しでも大学のイメージやブランドを創り出す必要があることから、このプロジェク

JRの往復料金（自由席特急券）と和菓子作り体験で4,300円です。また、佐賀駅から村岡総本舗、極楽湯の相互間のタクシー料金（1区間1台500円）を割引、「極楽湯」の料金を割引、などといった特典がついています。

お菓子づくり体験は当初、2000年10月から2001年3月までの予定でしたが、大変好評で今年の9月30日まで延期になったとのこと。作るお菓子は毎月変わるそうなので、和菓子好きの私はもう一度参加してみようかなとも思っています。皆さんもいかがですか。（かじはら りか）

トに大学側の反応が早かったとのことであった。

●大学関係者の出張時のお土産に利用

どのようなお菓子を作るかは、大学内にプロジェクトチームを組織し、お菓子会社と一緒に開発したそう。西南学院大学はアメリカ南部の宣教師のC. K. ドージャーによって1916年（大正5年）にキリスト教主義の学校として創立されたのが始まりであるため、“和”より“洋”のイメージということでサブレとしている。また、周辺の松林のイメージを表すため、サブレの上に松の実をトッピングしている。さらにスクールカラーの「深緑」をベースとした包装デザインも洒落ている。

このお菓子は今、大学の生協と西新にあるデパートのお菓子売場だけで販売されているが、やはり大学関係者が出張する時や学会時のお土産として良く利用されており、また、郷里に帰るときにお土産として買っていく学生もいるとのこと。

製造する方も生産するロットがあるので、職員数が



西南学院大学ブランドのお菓子 テールヴェルト ブッセ
（テールヴェルトとはドイツ語で松の深緑のことをブッセとはサブレみたいなお菓子のことを意味する）

少なく、利用が少ないような大学では採算割れとなる恐れがあるため、どこの大学でもできるという話でもないようである。

お菓子会社とすれば話題づくりという点では面白いようであるが、逆に大学ブランドということが足かせとなって一般消費者には浸透するには時間がかかりそうである。(やまだ たつお)

**地元産品を持ち寄り
村の将来をワイワイガヤガヤ
～七山村総合計画報告会**

澤谷 真紀子

平成11～12年度、当社で佐賀県七山村の総合計画づくりのお手伝いをさせていただいた。その計画の報告会を村の人々と一緒にやろうということを村役場が企画した。

実は「お茶酒(おちゃけ)を囲んでワイワイ・・・」という誘いで、地元の人たちが自慢の一品を持ち寄るということを聞いていた。私は仕事は担当していなかったが、うまい物を食べることに専念しようと参加させていただいた。

最初は当所の系乗が「辺境に活力がみなぎる時代」というテーマで話をし、次いで村内の事例報告として、大臼木集落が行っている中山間地域等直接支払制度のとりくみが紹介された後、一番のメインイベントである宴へと移った。

この日、次々と運ばれてきた料理を思い出せる範囲であげてみると。

- ・地日本酒(当社で仕込むモノより上品な味。各家庭で仕込まれたもので数種類あった)
- ・葉わさび漬(各家庭で作られているため少しずつ

違う味が楽しめた)

- ・豆腐(プラスチックのケースで来た(写真参照))
- ・イノシシの肉(角煮、生肉)
- ・ヤマメのせごし
- ・シャーベット状の冷凍柿
- ・七山産の野菜を使ったお総菜
- ・漬物、梅干しなどなど

色々な人が持ち寄るモノを見て、「かあちゃんの〇〇持ってくる」と言って取りに帰った人も何人かいた。中には「商品化したらいけるんじゃないか、やってみよう」という意見もみられた。

口も滑らかになってくると、あちらこちらで車座になり、七山の将来について車座での座談になってきた。農業後継者、嫁不足、高齢化などは、どこにでもあり、しかも七山村で一番悩ましいことだ。これらを徐々に解決し、村の活性化につなげようということで、村おこしの組織をつくろうという提案が役場から出され、この日の出席者を賛同者とする事で一致を得た。

大変面白い集まりだったが、私が一つ残念に思ったのは、この日の出席者が村の男性ばかりで、女性が2名(参加者約60名、当社より参加の女性と合わせて5名)しか参加していなかったことだ。

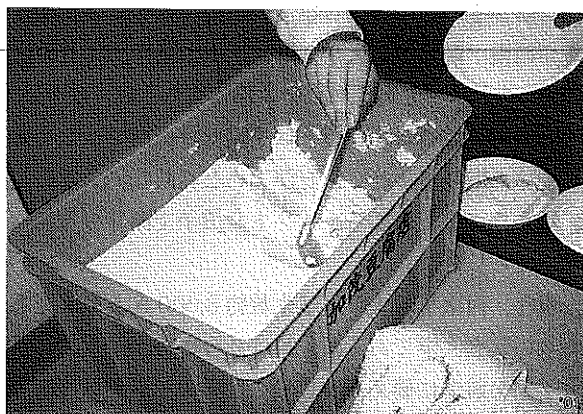
七山村で取り組まれてきた農産物直売所「鳴神の庄」、村の農産品を生かした加工品などは、女性や高齢者の力が加わらないとできなかったものだ。

本来ならば、かあちゃんが自分の作った加工品やお総菜を自慢し、将来について語り、時にはとうちゃんが裏方に回り、皿を出したり引いたりしているという姿もあるべきだと思う。

今回は多くのかあちゃんが参加する会になるとよいな、と思った。(さわたに まきこ)



大臼木集落の事例紹介



とうふは大きいケースに入ってきた

近 況

長崎ぶらぶらチャンポンツアー

～SAS九州春の旅

「SAS」とはシステムズ・アナリスト・ソサエティという難しい名称の会で、30年以上続く異業種交流会だ(全国で会員約750名)。「会則なし、入会・脱退自由」で何か面白いことをしたいという人が集まる会である。

そのSASの九州地区の集まり「SAS九州」で、なかにし礼氏の直木賞受賞作品(1999年)「長崎ぶらぶら節」の熱から冷めない人を先頭に、長崎のまちを歩くツアーを3月31日～4月1日に行くことになった。

テーマは「長崎のホンモノを味わう」だった。ホンモノとは、①本しっぽ料理、②本物の町検番の芸者、③正調・長崎ぶらぶら節、④本物の長崎チャンポンという、少し欲張りなもので総勢26名の参加となった。

○正調・長崎ぶらぶら節に大満足

旅行の企画段階で、町検番の芸者の手配をどういうツテで頼むのか分からず、結局、仕方なく長崎市のコンベンションビューローに電話した。

そこで「長崎市芸能振興会」という組織があり、そこに丸山検番というところもあると教えてもらった。本当は市内の旅館やホテルなどのルートでも頼めることを後で知ったのだが、ビューローの職員の話では「長崎ぶらぶら節が映画化されてからは検番への問い合わせが増えています」とのこと。一宴席で芸者さんが1人当たり2～3万円、三味線と踊りの3人以上で予算を組むのが普通だという。

宿泊したホテルは稲佐山の中腹にあり「1000万ドルの夜景が見える」と説明があった。日がとっぷり暮れて、町が美しくライトアップされる頃、芸者さん2名と三味線・歌の姐さんが現れた。三味線に合わせて歌と踊りが披露された。

こういう宴席慣れしていない人も多く、ボーッとステージを眺めている人が多い。このツアーに子連れで参加していた2～5才の子どもたちも思わず見とれたほど艶やかで新鮮なものだった。

最初に「ちりめん」「浜節」と演目が続き、3番目に「長崎ぶらぶら節」だ。参加メンバーの中には「長崎ぶらぶら節」を知っていて、かすかに口ずさむ歌声も聞こえた。



本物の卓袱料理

前半の演目のあと小休止。芸者さんは我々のテーブルを回ってくれた。失礼とは知りながらお歳を聞くと、三味線・歌のお姐さんは80代、踊りの2人は40代、60代だ。お酌を受けながらいろいろな話を聞かせてくれた。

- ・戦後200人くらいいた芸者も、今は16名となり、3つあった検番も、今は丸山検番だけとなった。
- ・客は水産業と三菱重工が主。戦後すぐ、水産業の景気が良かったときは、朝のせりが終わったその足で座敷で宴を開いて、宴会を始めるような酔狂な遊びも多かった。
- ・その頃は芸の修行に入ってくる若い女性も多かった。大変厳しく、実力主義の世界なため、途中で辞めていく人もいた。しかし、芸一筋の女の一生を志す気概の良さを認めて可愛がってくれる旦那も大勢いた。
- ・小説「長崎ぶらぶら節」が出版されてからは、芸者衆やひいきの客筋の中でも、本の主人公・愛八姐さんを知っている80代の年輩の芸者さんが大事にされるなどの反響もあった。

などといったことも、お酌しながら、するり、するりという感じの軽やかな口調で教えてくれる。

メンバーは皆大喜びで、昔、街中で育った三味線の音を思い出し目を潤ませる人もいれば、九州各地の歌を披露し合い、最後は芸者さんも混じってみんなで炭坑節を歌い踊り、楽しい宴席を過ごした。

○亀山社中からちゃんぽん発祥までを一日歩き。長崎はいろんな要素の詰まったまち

旅行2日目には、寺町通りから風頭公園の麓に行き坂本龍馬の興した日本最初の商社「亀山社中」跡を訪ねた。

地元の市民団体「亀山社中ば生かす会」でこの地を



長崎ぶらぶら節を舞う勝丸姐さん

語り継ぐ活動を行っている。ここは元の建物の構えをそのまま残して何度か新しく立て替えたものだ。家の中がそのまま亀山社中に関する資料、幕末時代を中心に長崎を訪れた人々の写真の展示場になっている。

その後、チャンポン発祥の店といわれる「四海楼」で専務の陳優継氏にチャンポンのルーツについて話を聞きながらいただく。

九州以外の人にはチャンポンは馴染みが薄いかもしれないが、これは豚骨・鶏ガラスープを使った麺料理で、強火で豚肉・魚介類・野菜を炒めながら一気に炊きあげてつくる。チャンポン麺という唐アクの水をつなぎにした独特の麺は、スープの味をよく吸うけれども、伸びにくいものだ。

長崎市内にはチャンポンをメニューとして出す店が推定1千軒あるという。もとは明治初年に長崎にやってきた中国人の若い人達（旅券も定かでなかったから、相当数が長崎の中国系商家や料理屋にころがりこんでいた）に安くて栄養満点の食事を、という料理人の面倒見でできた料理だという。こうした人間臭い話が長崎の本当の魅力だと思う。

今回の旅行は、昔ながらの長崎のまちの魅力や要素に触れるのがメインで、どちらかといえば「中華街に



四海楼名物の「ちゃんぽん」。錦糸卵が乗っている



亀山社中まではなが〜い上り坂が続く

行って、グラバー園に行って……」という、みんながよく知っている場所には近寄らなかった。

自由時間に有名なケーキ屋や杏仁豆腐を求めて制限時間ぎりぎりまで走り回った人、路面電車で乗り継いで公設市場を訪ね、こだわりの夜のつまみを仕入れてきた人もいた。

SAS九州のメンバーの旅行では「今日はここからここまでを歩きます」といった、おおまかなスケジュールを決めておけば、場所によって会の誰かが入れ替わり先導役となり、ガイドとなってくれる。町中のちょこっとしたことにも、説明が加わると、視点がとても広がって楽しめる。今回もいろんな視点で長崎を見ることができたと思う。

(澤谷 真紀子・尾崎 正利)

図「甘夏みかんの怪」二題

○ミステリーの巻……甘夏みかんの世代論

わが家には、甘夏の木が六本と八朔が二本、それに伊予柑が一本ある。いずれも、10～15年生ぐらいの木で、私の植えたものではなく、前に住んでおられた方が植えられたものである。去年、その内の甘夏二本と八朔が豊作で、おそらく500キロぐらいは採れたはずである。自分の手柄でもないのに、ホイホイと喜んであちこちに、「迷惑便」と称して送らせていただいた。

今年は、たいした手入れをしたわけではないのに、甘夏六本全部が豊作で、トータルでは去年以上の収穫になると思う。思いあたることと云ったら、剪定をしたことと油粕を1～2俵／本やったことぐらいである。どうも剪定が一番効いたのではないかと思う。八朔は剪定をしなかったから、あまり生らなかったのではないかと思っている。

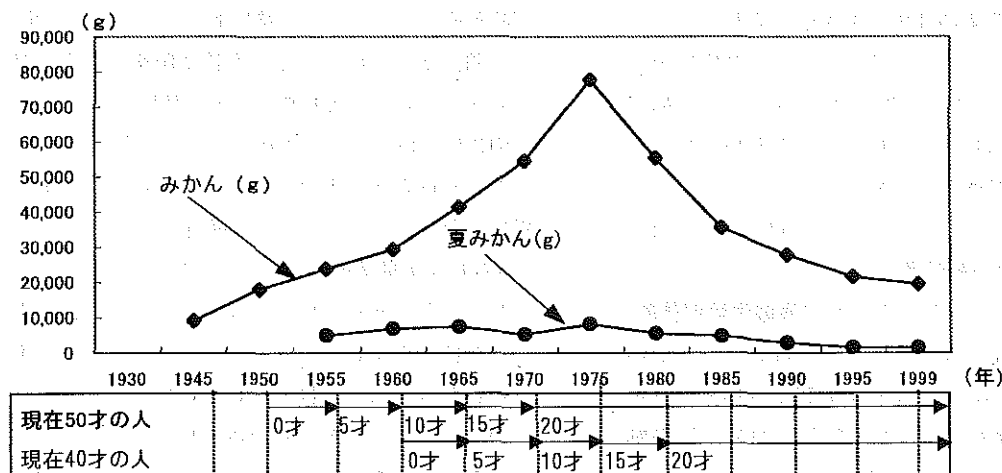
とにかく豊作で、「豊作による迷惑便」と称して数

1世帯当たりの消費量・額（精製糖は年間の製造量）

	1.みかん (グラム)	2.夏みかん (グラム)	3.精製糖 (千トン)	4.白砂糖 (グラム)	5.ビスケット (円)	6.チョコレート (円)
1930			507			
1945	9,000		8	225	※2 17	
1950	18,000		94	3,525	349	
1955	23,740	※1 4,935	1,011	15,519	625	
1960	29,284	6,796	1,184	16,897	568	※3 583
1965	41,409	7,446	1,615	17,667	500	950
1970	54,560	5,214	2,463	17,449	721	1,180
1975	77,681	8,084	2,413	15,481	2,238	2,032
1980	55,206	5,385	2,337	12,115	2,882	2,331
1985	35,482	4,783	2,124	10,734	3,334	2,408
1990	27,792	2,842	2,125	9,692	3,038	3,133
1995	21,433	1,587	1,974	8,536	3,242	3,216
1999	19,463	1,536	1,890	7,862	3,368	3,827

(注) 1.4.5.は長期統計総覧、家計調査年報より。2.6.は家計調査年報より。3.は「日本の百年」国勢社より。なお4.の1990年以降は「砂糖」という項目なのでわずかに数値が違う。※1は1958年、※2は1947年、※3は1962年のデータ。空欄はそれ以前のデータがなかった。

1世帯当たりのみかんと夏みかんの消費量



(注) みかんは長期統計総覧と家計調査年報の併用。夏みかんは家計調査年報。

○現在50才の人…25才までみかんの消費量は急増。その後激減。

○現在40才の人…15才までみかんの消費量は急増。その後激減。

十カ所に送らせていただいた。

今まで、この押し売りに対して、手紙、メール、電話、会ったときの話などで、礼の言葉をいただいた。その、みなさんの声などを聞いている内に、何となくニュアンスに差があるのに気がついた。

みなさんは優しいので、「おいしかったよ」とか「ジューシーだったよ」とか言われるが、それぞれが少し違う。40才から50才ぐらいの所に分岐点があって、上の年齢層は「かなり食べてみたな」といった感じがするし、若い層は「心やさしい言い方だな」という雰囲気を感じる。

「ひょっとすると、子供の頃の甘みとのつきあいの差かもしれん」と思った。ミステリーなんてオーバーな、と思われるでしょうが、一応データを見て下さい。

砂糖の家庭での消費が急増するのは1955年からで、その年生れの人は現在45才になっている。

みかんの話なので、「みかん」と「夏みかん」のデータもつけた。近年、家庭での消費が急減している。みかん農家も苦しい。

こんなことを書いていて、もうひとつ気づいたことがある。夏みかんやみかんが売れないのは、農業技術者がタイマンだからかもしれない。つまり、若い人に

はチョコレートのように銀紙などくるんだものが木に生っていないと気に入らないのだ。

「こんなもので、なんにも言えないよ」という方もあるかも知れませんが、今私の近辺で探せた資料です。

○ミステリーの式……迷惑便の弁

これは、ミステリーというより変な話という方がよいかもわかりません。値段のことを書いてみる。

昔、松下幸之助は「水道哲学」といって、水道の水のように安くモノを提供できるようにしようとしたそうですが、この間駅で買った水は500ccが130円だった。自動車のガソリンは1リットルが100円ぐらいである。ところで、甘夏みかんはいくらだと思いますか。この近辺のスーパーでは、安売りで59円/個。一般には75円～130円/個で、鹿児島物が置かれていたりしている。農家の直売所では200円/4個で、糸島で採れたもの。農家の仕事って大変ですね。アマナツ1個が500グラムぐらいですから、水より安いのです（皮などは20～30%です）。ということは、私がうれしそうに送っているモノは、ただみたいなのなのです。まさに「迷惑便」です。

（いとのり さだよし）

関子ども達が80才の高齢者に

～ジュニアボランティアスクールで高齢者疑似体験

高齢者疑似体験セット「うらしま太郎」というものがある（5年ほど前のよかネット記事には頻繁に登場していた）。白内障を体験できる眼鏡や耳栓、関節動きにくくするサポーター等を装着し、80才ぐらいの高齢者を体験してみるといったものだ。

今回は、福岡県新宮町のボランティアセンターが企画する、ジュニアボランティアスクール（小学生対象）の講師として、うらしま太郎セットを持って出かけた。



小学5年生が80才のおじいちゃんに



スクールを終了してニコリ。兄弟姉妹での参加も多かった

参加者は公募で集まった小学校1～6年生の計17名、4グループに分かれていた。

最初に少しだけ老化についての話をし、器具をつけて体験してもらった。2セットしかないの、一人が装着後、グループと一緒にセンターを回って歩いた。その間、空いている人に、耳栓や眼鏡、手先が動きにくくなるグローブ等をワイワイと体験してもらった。

中にはそれほどやる気の見られない子どももいたが、見かけだけだったというのを、最後に書いてもらった感想文からわかった。一部を紹介する

（うらしま太郎体験の感想文より抜粋）

- ・わたしがめがねをはめて見ると、そばにあったちらしがぼやぼやしていました。1ばんのおじいちゃんをした人が自どうはんばいきのぼたんや、ジュースが出る所が分かりづらかったです。あと、手ぶくろで、この字を書いてみると……だからひらがなでも大きくしか書けませんでした……。 （3年生）
 - ・耳せんをして人の声を聞いてみたらすごききにくかった。……おとしよりはこんなにたいへんなんだなと思った。 （3年生）
 - ・……紙が緑色に見えていましたが、本当は水色だったのでびっくりした。かいだんはつまづいて、ころびそう、こわかった。坂をのぼるのもきつかった。……80才は大変だなと思いました。もし困っていた人がいたら手つだってあげたいなと思いました。 （5年生）
- この経験を通して、自分のことに置き換えて考えることで、お年寄りとの接し方が少しでも変わったらと思う。子どもだけではなく、わかっていると思いこんでいる大人の方にも是非体験していただきたい。

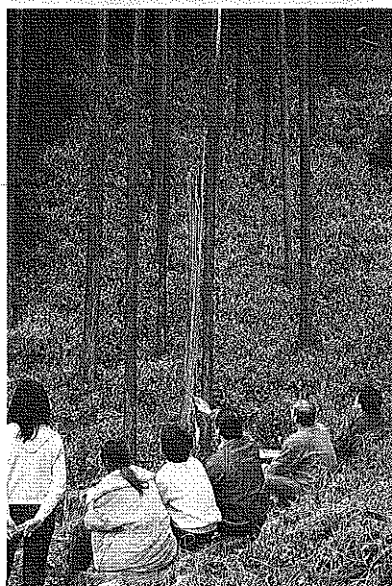
（澤谷 真紀子）

山の林間学校

佐賀の七山村で林業を営んでいる諸熊さんが山中で山菜を採り回る動きは、驚くほど俊敏であり、まさに山の人だった。それはわさび狩りに参加したメンバーのみんなが感じた印象だった。

この日は、諸熊さんの案内で、わさびをはじめとした山菜をとらせてもらった。諸熊さんは、七山で林業で生計を立て、七山村だけでなく、県下で林業の普及や活性化などに非常に力を入れている方である。今回は、珍しい「わさびの林間栽培」という言葉に惹かれて、若い女性を中心の総勢12名で、諸熊さんの山に入らせてもらった。私は手入れがなされている山に入ることが初めてだったので、まずその山の美しさに驚いた。わさびやわらびといった山菜に必要な日光を確保するために、木が間引いてあり、ときおり差し込んでくる柔らかい日差しが、山裾一面に広がるわさびの白い花を照らしていた。

わさびといえば、根っこをすりおろすイメージしかなかったのですが、てっきりわさびを根っこから掘り起こすものだと思っていたのだが、諸熊さんは葉わさびを栽培しており、根っこは収穫しないのだそうだ。わさびの葉っぱや茎（地上に伸びている部分）をかじってみると、ちゃんとわさびの風味や辛さがあった。諸熊さんは、間引きされた古木に腰掛けながら、わさびの茎と葉っぱを80度のお湯にさらし、氷水で冷やすことで、さらにわさびの風味が引き立つことや、わさびはだいたい3年ぐらいで、若い芽が育つことなどをわかりやすく教えてくれた。その様子は、まるで山の学



山の林間学校風景

校教室の授業が始まったかのようにあり、私たちは先生の話聞き逃さないように、必死に聞いていた。

(本田 正明)

新人紹介

オランダ人はでかかった

最近大学生のあこがれの就職先というトレンドに、少しだけ変化が現れてきたように思う。それというのは、大企業の倒産やリストラが当たり前のように行われる今の時代では、どこの会社に勤めようと将来が保証されないという認識が学生の中に生まれつつあり、会社が無くなるうとも仕事を行っていけるように“自分自身を高めなければならない”と考える人が増えてきたからではないだろうか。

私は、昨年オランダの都市計画を行っている会社で仕事をする機会があり、個人主義といわれるヨーロッパ型の仕事のあり方を肌で感じる機会があった。その中で一番印象に残っているのが社員の一人ひとりが“自分のスタイル”を持っていることである。それは単なるファッションスタイルや生活スタイルの話だけではなく仕事に対しても非常に色濃く反映されている。

私が勤めた会社は、建築と都市計画の部門があり、私はその都市計画の仕事をさせてもらったのだが、住宅開発のプランを提案する際に、プランの内容に対して指導らしい指導を受けることはほとんどなかった。オランダの典型的な住宅開発や基本的なルールを教えてもらっただけで、後は日本人にしか浮かばないようなアイデアを盛り込んでほしいということを常にいわれた。また、大規模な住宅開発を行う際のワークショップに参加したときに、金属をメイン素材とした風変わりな町のデザインプランを考えた人がいたのだが、コンセプトがきちんとしており、目的意識がはっきりしていれば、その地域住民にも受け入れられるのである。それだけ個人の考えが尊重される社会がオランダには根付いているようである。

最初のうちは、そのように個性を全面に出しすぎると、話がまとまらないのではないだろうかと不安を感じていたのだが、彼らは話し上手なうえに聞き上手であり、議論が無駄なく非常にスムーズに行えるのである。そのときばかりは、オランダ人男性の平均身長が190cmあるという身体のでかさと同様に、彼らの人間

としての質の高さに驚かされた。

日本では寡黙であることが美德とされるようなところがあり、まだまだ議論上手とはいえないように感じる。また、自分の考えをしっかりともち、まわりの意見に流される人が多いように思う。しかし、これからの社会ではますます地域レベルや個人レベルでの問題を話あわなければならない場が増えてくるだろう。その中で、いかに自分の考えを他人に対してわかりやすく述べ、また人の意見に耳を傾けるかが重要になってくると考えている。

私はこの仕事を通じて多くの人と知り合うことにより、新しい刺激を受け、自分のスタイルや自分らしさを確認しつつさらに高めていくことによって、豊かで

魅力ある人間に成長していきたいと思っている。

(本田 正明)



お酒が大好きなので、よかネットの宴会部長の座を目指したいです

少年よ視野を広く持て

私は体を動かすことが大好きである。高校の時は、ハンドボールをやっていた。バスケットボールとサッカーを足したようなルールで、スピードのあるゲーム展開がおもしろく、数々の華麗な技もあるのだけれど、マイナーなスポーツである。試合では地区大会で、1勝すれば県大会に行けるほどである。

私は「サイド」といって、敵チームのシュートが失敗したら、真っ先に飛び出して味方のキーパーからボールをもらい敵チームに攻めるポジションだった。しかし、タイミングがずれると敵チームが戻ってきてしまう。そうすると、状況を判断して敵が近くにいない味方にパスをしなければならないのだが、私はそれが苦手だった（だいたい上手な方ではなかった）。部活をしていた3年間、私は顧問の先生にいつもこのことで「視野を広く持て」と注意され続けた。この言葉は、その後私の目標となる。先生は、ハンドボールをしている私に向かって言われたのだが、普段の私も、思ったら脳目もふらず一直線。他のものをみる余裕を持っていなかった。これにやっと気付いた私は、大学生になり、「視野を広く持てる人間になろう」と決心する。大学では年に2回1週間、夏は北アルプスカ屋久島へ登山を、冬は長野ヘスキーに行く合宿があるアウトドアスポーツサークルに入った。このサークルは、アウトドアに限らず、蟹がたくさん見られる場所がある、唐津に「ラーどん」（麺はうどん、スープは豚骨）があるなど誰かが提案しては、昼夜問わずすぐ行ってみようと盛り上がる人達の集まりだった。どうかしたら

少し幼稚なこと（例えばクワガタをとりにキャンプに行く）でも興味をもち、楽しむ人が多かった。また、合宿で登った北アルプスでは、自然の厳しさと美しさを肌で感じて、普段の生活は決して当たり前ではないことを学んだ。

この周囲の影響で、体を動かすことが好きなくせに出不精だった私は、あちこちに行く癖がつき、自分の目で見て感じることの楽しさを知った。まだまだ、自分の目標とする「視野の広い人間」にはほど遠いが、もっといろんな所に行き、様々なことを吸収したいと思う気持ちは強くなるばかりである。人との出会いを大切にこれから頑張っていきたい。どうぞよろしくお願いします。

(愛甲 美帆)



機能を使いこなせなかった一眼レフカメラに再度挑戦しようと思っています

地域づくりのプランナーが集まって、協同組合をスタートさせます。

～協同組合 地域づくり九州～

21世紀の地域社会は、「知的インフラを生かしたネットワーク型の地域形成づくりの時代」と言われています。地域の様々な問題を見つけ、その解決方法を探るための「地域づくりの知恵」が今後、ますます重要になってくると考えられます。そのため、地域に密着した仕事を続ける仲間が、それぞれの専門家のネットワークを生かすため、協同組合を設立しました。

この協同組合はシンクタンク、建設コンサルタント、建築士、不動産鑑定士、環境プランナーなどをはじめ、財務、会計、市場調査、マーケティングなどの分野の専門家が集まった集団です。その知識・経験や技術を活かし、地域づくりを行っていききたいという思いで、昨年準備を始め、さる2月15日に設立総会を行い、さらに3月30日に国土交通省及び経済産業省の認可を得、設立をすることができました。

この機関誌がお手元に届くころは、「設立披露パーティ」も終わり、各組合員の皆さんが個別訪問をしているところではないかと思っています。

協同組合 地域づくり九州のメンバー

代表理事	㈱よかネット	取締役	糸乗 貞喜
理事	㈱イゴス・システム・アトリエ	代表取締役	山口ひろこ
理事	㈱群設計工房	代表取締役	佐伯 憲二
理事	㈱ジーコム	取締役副社長	新貝 耕市
理事	㈱生態計画工房	代表取締役	土谷 光憲
理事	㈱大和不動産研究センター	会長	麻生 敏雄
理事	都市企画センター㈱	代表取締役	尾川 昇
理事	ミウラクワノパートナーシップ	代表取締役	三浦 逸朗
理事	㈱宮崎まちづくり計画	代表取締役	河野 敏郎
理事	㈱よかネット	代表取締役	山田 龍雄
監事	松崎会計士事務所		松崎 栄一
監事	箕原会計士事務所		箕原 俊樹

協同組合を設立するにあたって各組合員に①何故、参加しようと思ったのか、②組合としてどんな仕事をしたいのかを聞きましたので、それぞれの組合員さん

の思いを感じとっていただきたいと思います。

●参加の理由は「他分野の方との交流・触れあい」

- ・異業種の方々と一緒になって、都市開発や地域活性化のアイデアを情報交換できるのが楽しみである。
- ・様々な分野の業種が意見を付き合わせて、より楽しい仕事手がけられるのに期待している。
- ・単独では対応できない業務での、様々な知恵を結集すれば、広範囲な業務に対応できるようになれる。
- ・県内だけでなく九州のなかの様々な人々、分野とのふれあいの場をつくっていききたい。
- ・宮崎県内での活動が中心であるため、他県の人々、分野との交流がしたい。
- ・開発、経営コンサルティング系の方との交流を図り、人脈や業務内容の幅を広げたい。

●協同組合でいろんな仕事を手掛けていきたい

- ・経営が悪化している第3セクターを地域雇用を維持しながら再生させる仕組みについて研究したい。
- ・地方の自治体がアンテナショップを街中で作ろうという時に、必要な宣伝、物件さがしなどのトータルなコーディネートを手掛けたい。
- ・大学や企業の研究能力や技術を市民ニーズと突き合わせて、新しい商品開発を進めたい。
- ・知的障害児の社会参加の機会づくりについて研究してみたい。
- ・新しい長屋的な暮らしを研究してみたい。
- ・現在、自治体や建築士会が一般家庭で行っている耐震診断のようにシックハウス、シックビル診断を行う仕組みをつくりたい。
- ・家を建てるときに、施主が原木切り出しから廃材処分まで参加できるような住宅づくりを手掛けたい。
- ・産業が農業主体の市町村において、農地の多面的な利活用方策について検討してみたい。
- ・街中の活性化において、土地区画整理事業の位置づけを考えてみたい。
- ・グリーンツーリズムなど、農業・漁業等の産業の育成のお手伝いがしたい。

このような思いを抱きつつ、協同組合でのスタートをしたところです。興味のある方はご一報していただければ、パンフレット等をお送りさせていただきます。

□組合事務所：福岡市中央区天神1丁目15-35

ホンダハビエ5階（㈱よかネット内）

TEL 092-731-7671

FAX 092-731-7673

第9回 よかネットパーティのご案内

人と人との交流の輪づくり“人もうけ”の場として毎年開催しておりますが、今年で9回目を迎えることとなりました。みなさんが喜ぶような「面白い話」「うまいモノ」「うまい酒」をご持参のうえ、人もうけをお楽しみ下さい。

日時：平成 13 年 5 月 19 日(土) 13:00～16:00

※時間内に自由にお越しください。

場所：警固神社境内 東側棟

福岡市中央区天神二丁目 2-20

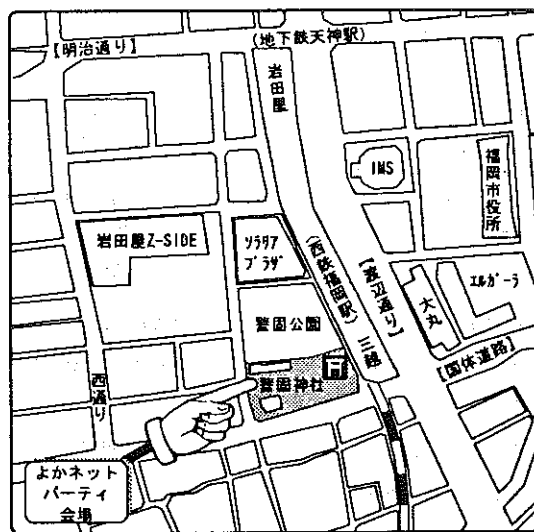
TEL: 092-711-8551

○「おすすめの品」は調理済みのものをお願いします。生もの(例:生魚、くさりやすいものなど)はご遠慮ください。

○日もちのするものであれば、お手数ですが、なるべく事前に(1～2日前)に当社へお送りください。当日ご持参の場合は、早く盛りつけられる状態であれば助かります。

○参加者リストを作成します。名刺をお持ちください。

○本パーティーではできるだけごみを出さないよう、例年有田焼のお皿を窯元に注文しています。「ごみ軽減協力費」として 600 円のご負担をお願いします。



○参加ご希望の方は、当事務所までご連絡くださいますようお願い申し上げます。また、何かご不明な点がございましたら、なんなりとお問い合わせください。

編集後記

8年前に亡くなった祖父は、田川郡川崎町で長く教職を務め、昭和40年代前半には郷土史を書いていた。最近、その本に目を通す機会に恵まれたが、祖父本人の意向通り、読本風で子どもにも読みやすく、これまで目にした郷土史とは一線を画していた。

別冊の付き合いで、その川崎町の雪舟庭園「魚楽園」(前々号で紹介)の活性化にボランティアで入ることになったのだが、祖父も関わりが深かった。郷土史でも詳しく触れている。母の話では、祖父は生前「雪舟庭園を何とかしたい」と言っていたそうで、世代を超えてバトンが回ってきているのかなあ、と少し感じている。今度、庭園の隣に蓮池を掘って秋に蓮根を収穫しようという話をしている。(伊)

よかネット NO. 51 2001.5

(編集・発行)

㈱よかネット

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハビエ5F

TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

<http://www.yokanet.com>

[mail:info@yokanet.com](mailto:info@yokanet.com)

(ネットワーク会社)

㈱地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-6942-5732

名古屋事務所

TEL 052-285-2401

東京事務所

TEL 03-3226-9130